路が碁盤形に出來るが、安治川以北木津川以西、道頓堀以南に至つては自から規格を破つた曲線大路や星條大路が出來ることになつてゐて何だかたよりない趣が見える、蓋し今にして秀吉の偉大さを思ふの感がふかい。

最後に大阪市街圖を見て面白いと思ふのは、船場島之内の中樞部には少いが、下船場などをよく見ると町割の中に道路が行きつまりになつたのが非常に多く目につくことである、これは袋町であつて東洋風の市街では甚だ多く見られるもので交通の不便を敢て意としない悠長な氣分の發現だとも考へられるのであるが、實はこれは經濟上の現象であつて、かやうな住居を上方で廊子住居といつて、表住居から區別されてゐる、地圖には出てゐないけれども、船場、島の内の盛り場といへども町の間に一間廊子や二間廊子が設けてあつて、そこに入ると往々九尺二間の小さい住宅が數戸櫛比してゐるのが例である、しかし今日の大阪はかやうにして町家の裏の空地を極端に制限しても猶人口の收容が出來ないから、愈西洋風に二階三階と立體的に住宅を昇して行く氣運に向つて來てゐる、これ又世態變遷の一現象といふべきであらう。（藤田）

談叢

阿蘭陀木綿

鶴岡學人

大正十四年十一月廿三日北河内郡門眞村に伊達醫院を訪ねた、同家は地方きつての名門、十三代つゞいて醫者の家で當主葛岡氏は目下京都府立醫大に在學中とのことであるが後見人として伊達富士雄氏が醫院を開いて居られる。

系圖の正しい名家であるからに其の家屋敷も中々立派なもので大和屋根の西方の切妻が白壁にしてあつて、東の方は破風作りになつた古色蒼然たる母屋がある、入つてみると母屋の天井は下から梁木が見えて普通の天井のやうに梁

の下に釣つてあるのとは違う、色も黒光りになつてゐる、床もひくい、天井板の上には藁を敷いて更らに土がのせてあるとの事で古い住宅建築の好參考である、手島石の井筒が一尺程も磨り減つてゐるのも面白い、それよりもこの名家に古文書類が無いであらうかと尋ねた處、二百年以前に建てたまゝの古い土藏の二階から箱入の文書を一部分持ち出された、數百通の古文書は主としてこの名家の親族であつた守口町本陣吉田八兵衞氏の古文書であつたが、葛岡家の古文書は別の古い箱に充滿してゐるとの事であつた。あまり一度に澤山出してもらつても、到底讀みきれないので、それは後日に廻はして、差當り吉田文書だけ一順目を通した。守口の本陣は紀州侯の定宿であつたので、當時の家の圖面を始め紀州侯の宿泊に關する通知書といつた類の往復文書が甚だ多い。淀川の往還に關して角倉役所からの文書又は古證文などに面白いものや、一札と記した養子緣組の邪宗門でない身元保證狀といつた類など歴史家の參考に供したいものが馬鹿に多かつた中で、二通阿蘭陀木綿に關する古文書を發見した。

寶暦雜錄を見ると寶暦九年の初冬、江戸より攝河泉の代官へ木綿の種を少々宛下され棉を作る百姓共へわりつけ、來年月々一粒づゝ種を蒔て試みうへとの事也、その種朝顏の種の如し、肥には牛の糞を用るよし、此綿生茂るときは高さ一丈餘にして、綿のふくこと大なる手に一つかみほどふき、梯子にて綿を取納るよしなりとある、その阿蘭陀木綿の栽培當時を想見して德川氏一代の名君吉宗が產業にいかに熱心であつたかをしる資料に甚だ面白い材料である。

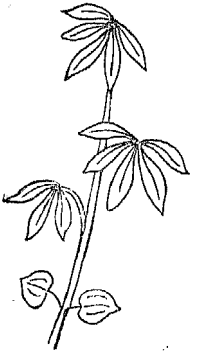
この文で見ると新らしく舶來した種を栽えて高さ一丈にもなつて、一つかみほどの棉花を梯子で取らねばならぬ程にと期待して栽えさしたその種はどうなつたか、

阿蘭陀木綿樹種御代官所御領所え蒔付可申旨被仰渡右木綿樹種並養ひ方、蒔附方御書附共被遊御渡奉請取候、右御書附の趣を以蒔付養ひ方の儀委細支配所々え申遣生立方の儀其時

々御屆可申上候尤當年も未暖氣に候得者、誠に少々宛霜除等仕地所念入蒔附見可申旨、芽出候はゞ其段も委申上おもに來年春先より七八月比は別て蒔付多き樣種配り仕、御別紙之通可相心得旨是又承知奉畏候右之段早々支配所に罷在候分は銘々可申遣候以上、

卯九月十六日

卯九月十六日とあるから寶曆九年卯年の文書だと見る、この文書が寶曆天明の古文書と一束にしてあつた故に大凡間違ひがないと思ふ。栽培方法を敎へ愈芽が出たならば、其の生ひ立の樣子を屆け出でよといふ差圖である、これ全く前文の期待が然らしめたもので、當年九月はまだ暖氣であるから試に少々蒔付けて見よといふ命令など、いかに熱心であつたかを物語るものでなくて何んであらう、さてかやうにして明くれば寶曆十年七月に吉田八兵衞は左の如き圖畫入りの上申をしてゐる、



阿蘭陀木綿樹當時の圖畫

右五月十三日に蒔付六月上旬に芽出當時右之通御座候尤七拾六粒蒔候内にて壹本生出申候、且又六月六日に七拾六粒蒔候内壹本生申候此儀は末二葉にて御座候以上

辰七月　河州茨田郡守口町　八兵衞印

これで見ると播種の成績は不良で、七拾六粒の中一本しか生えないので折角の洋種移植も成功せなかつたものと見ねばならぬ、しかし寶曆前後の殖産工業の政策がかやうに徹底的に行はれたといふ點に於て歷史的に面白い資料であると信ずる。和漢三才圖會を見ると凡攝津備後之産爲最上、播磨丹波備中並佳、河州紀州次之と論じ、品種の中では蝦手棉煙草棉の二種は良くな

いが、神樂綿、佐利綿の二種がよい凡神樂、佐利之二品爲最上三十餘年以來行于世とある、この三才圖會は寺島良安の正德二年(一七一二)の著述であるから、それから三十年以前延寶頃には既に攝河泉の棉花栽培は進歩して、攝州は純白を以て勝り、河州は緒の細いので覇を唱へ、丹波は顆の大なるを以て誇つてゐて各地それ〴〵特徴ある棉産してゐたのであるが、正德より後五十年吉宗將軍の時にこの阿蘭陀木綿種の輸入栽培があつたのである、河內以外攝津や和泉での栽培結果はいかゞであつたか、それが後日にいかに繁殖したか、將來又々資料が出まいものでもあるまいと思つて不取敢この一文を草しておく。

附　記

以上の記事によりて和蘭木綿といふは木綿にあらずして一年生の草綿なるを知るべく其種朝顔の如しとあれば、綿毛を取つた跡に白い細毛のゝこる普通の草綿 Gossypium herbaceum でなくて、細毛の少ない海島棉 G. barbadense であつたのであう、埃及棉の種類である。栽培に成功しなかつたのもそれが熱帶產であつた故であつた、序に云ふがこの吉田八兵衞は守口町で紀州侯の本陣である、八代將軍吉宗公が紀州から大阪に出て淀川船を利用して江戸に出た時にこゝに宿泊したこともあつたと見てよい、吉宗公と其本陣と、この珍らしい舶載種の栽培と併せて考へることも面白い追憶である。

○露西亞地質調査所近況

最近露西亞の地質調査所はヴアシリ・オストロヴに於ける大きな建物に置かれることになつた。多くの部屋は地質技師にあてがはれた。技術者は露西亞全部に亘つて探究し、一般に冬期は內業に從事するのである調査所には地質技師の數二百を下らず所員全部では四百名居る。凡ての探究結果は中央部に集められる。經濟上必要な鑛物の賦存の狀態や分布は特別な地圖上に記入される。建物の最上階は全部陳列館に使用される。